

2/5 エズラ記 3 章 8-13 節 「喜びの声と泣き声」

小池 宏明 牧師

紀元前 538 年ごろ、ペルシアの初代王キュロスは、ユダヤ人たちにエルサレム神殿（神の宮）の再建のため、故郷に帰るよう命じた。これは主なる神様の力強い働きかけによるものだった。南ユダ王国の首都エルサレムにある神殿がバビロン帝国によって破壊された紀元前 586 年から約 48 年経っていた。

* 礼拝生活を土台に神殿建設開始

数万人からなる最初の帰還民の指導者は、ユダの首長シェシュバツアルとヨシュア、そしてゼルバベルであった。このゼルバベルが、マタイの福音書 1 章のキリストの系図に出てくるダビデ王朝の末裔であり、主イエス・キリストの先祖に当たる人物だ。帰還民たちは、ひとまず、それぞれの先祖の出身地に戻ったが、エルサレムに集まって来て、モーセの律法の書に従って、全焼のいけにえをささげるために祭壇を築き、朝ごと、夕ごとに、全焼のささげ物を実行した。つまり、何よりも先に主なる神様に礼拝をおささげした。これが今日の私たちの毎日の礼拝生活につながっている。私たちも、朝に、夕に、主なる神様に祈る。主の日を聖別して、主の御前に出て礼拝をささげるのだ。

こうした礼拝生活を土台にしながら、信仰によって神殿（主の宮）の工事が始まった。神殿の基礎が据えられた時に、民は主への賛美をささげた。それとともに大きな喜びの叫びと泣き声が響いたという。(3:11~13)

* 悔い改めつつ未来に向かって

ソロモン時代の神殿を知っている老人たちは、大声で泣いた。それは再建されようとしている神殿の基礎があまりにも小さかったからであろう。そもそも、ソロモン時代の神殿が破壊されたのは、イスラエルの民が主なる神様に背を向けて、異教の神々や偶像の神々に頼った偶像礼拝の罪のためだった。

私たちは、過去の罪に蓋をして、無かったことにはできない。私たちにできることは、過去の罪や失敗を心底悔い改めて、それを教訓にして前進することなのである。

一方、神殿の基礎が完成した時に、喜びにあふれて大声で叫んだ人々が多くいた。完全に破壊されて、廃墟となっていた場所が、再び回復しようとしている姿は、預言の言葉のとおり、将来と希望を与える主の御心がはっきり示されたことを意味している。

私たちの日々の生活も、教会の歩みも、様々な困難や課題があるが、ただ、昔はよかったと嘆くのではなく、悔い改めるべきことは、悔い改めつつ、未来に向かって、歩んでいきたい。